【３】春日地区ってこんなまちです

（春日地区の歴史）

春日地区の歴史は古く、「堺木」という地名は「松浦郡」と「彼杵郡」の境として、奈良時代にできた「風土記」に登場します。（次ページ参照）また、鎌倉、室町には「大村覚書」という古書に松浦氏と大村氏の領土の境として「山中観音堂」が示されています。

戦国時代になると、「平戸松浦氏」と「宗家松浦氏」の勢力争いの戦場となり、横尾に「小田の砦」、赤木に「於玖の砦」が築かれました。

江戸時代になると、平戸藩政下におかれ、「東彼杵郡佐世保村」の政治に組み込まれることになります。

※1902年（明治35年）市制が施行されましたが、この地区は、東彼杵郡の飛地「東彼杵郡佐世村」として残りました。その後1927年（昭和2年）佐世保市と合併し、1938年（昭和13年）この地区も、それぞれの町名を横尾・春日・桜木・赤木としました。

この間、1908年（明治41年）には、本格的なダム式の「山の田水源地」が竣工し、同時に周辺や水源地に到る沿道には桜が植えられ、長い間「山の田の桜」として市民に親しまれてきました。

また、戦後間もない1946年（昭和21年）門屋盛一氏を中心とする人達が、戦災孤児収容施設「慈海寮」（後に若竹寮と改名、天心寮の前身）という児童福祉施設を現在の桜道沿いに開設させたことは、福祉分野における先進地域として、特記すべきことです。

〔佐世保市における春日地区の位置〕

山中観音堂（桜木町）

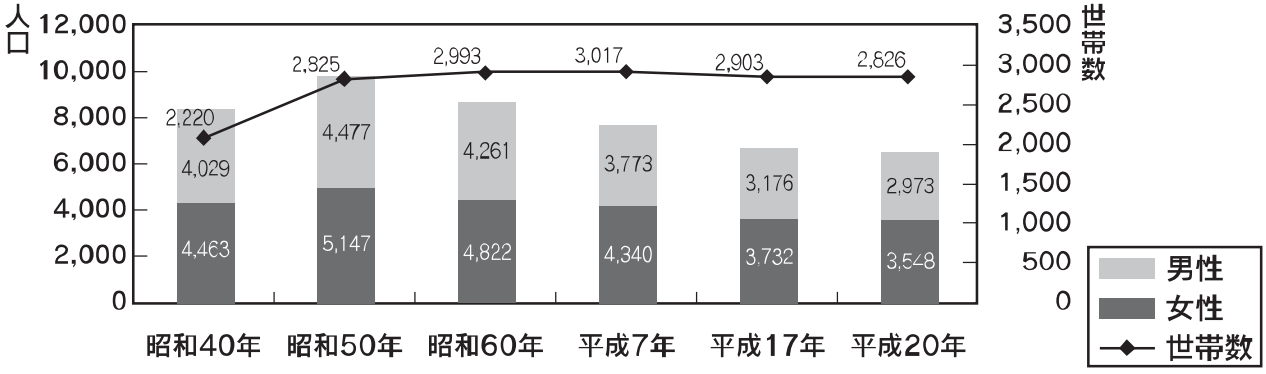
※　～1901年　東彼杵郡佐世保村
　　1902年　佐世保市誕生
　　東彼杵郡佐世村誕生
　　1927年　佐世保市と合併
　　1938年　横尾・春日・桜木・赤木と町名を命名

★春日地区って……どのあたりをいうの？

現在、春日地区と呼ばれる範囲は、次のとおりです。

町　　名	春日町、横尾町、赤木町、桜木町

（春日地区の人口推移）　※10月1日現在



（春日地区“わがまち自慢”）

春日地区には“自慢”がいっぱい！その一部を紹介します。

堺木（松浦郡・彼杵郡の堺）

春日町と左石のバス停の中間に「堺木」というバス停があります。この「堺木」は「境木」の意味で、郡と郡との境の目印です。

奈良時代にできた「風土記」に「肥前国の郡はい」とあり、ここでいう郡は、その中の「松浦郡」と「彼杵郡」です。「堺木」は、まさにこの両郡の境であったのです。「堺木」は奈良時代からの古い歴史をもつ地名であり、明治時代には「北松浦郡」と「東彼杵郡」の境となります。

さらに、「北松浦郡大野村」と「東彼杵郡佐世保村」の境界にもなります。

平戸街道（往還）

1812年（文化3年）佐世保に足を踏み入れた伊能忠敬（いのうただたか）は、春日地区にさしかかった際「字（あざ）折橋、枝（えだ）横尾、佐世保川巾（はば）十二間（けん）、左に春日社、字境木郡界迄（あざさかいぎぐんかいまで）二十六町二十一間」と測量日記に書きとめています。つまり、忠敬は平戸街道筋を測量しながら春日地区までやってきたのです。

折橋方面から桜道に向かって北上し、桜道に来て直角に左折し、橋を渡って国道をまたぎ、旧道を通って春日神社の前を通って堺木に至ったのではないかと考えられています。

忠敬の測量風景や平戸藩主の参勤交代を想像しながら歩いてみてはいかがでしょうか。

春日神社

春日地区の象徴ともいうべき春日神社は、平安時代の970年（天録元年）奈良春日大社の主神である「天児屋根命（あめのこやねみこと）」をこの地に分霊、創立したとされています。

その他に素戔嗚命（すさのおのみこと）・保食神（うけもちのみこと）を祭神としています。

1967年（昭和42年）御鎮座壱千年祭が盛大に執り行われ、その記念碑が境内に建立されています。

例祭日の9月19日は、領主であった大村藩主が代拝されていた日であると伝えられています。現在の例祭日は10月23日で、各町が担当し、一大行事となっています。

山の田水源地

山の田水源地は、1908年（明治41年）佐世保市初のダム式のものとして旧海軍によって造られました。浄水場も同様で、市は海軍からもらった原水を浄水し、市内に給水していました。このとき、佐世保市民は初めて水道管による給水を受けました。

貯水量５５万１千立方メートル、満々と水を蓄えている様子は美しく、まさに壮観です。またこの周辺は桜の名所としても市民に親しまれています。